

令和 5 年 4 月 28 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K06113

研究課題名(和文) 明治・大正期、北海道の都市公園の開設・改修、公園設計に対する社会文化史的考察

研究課題名(英文) Historical Research on Opening and Renovating Process of Hokkaido Urban Parks established in Meiji, Taisho era from Sociocultural Perspective

研究代表者

小林 昭裕 (Kobayashi, Akihiro)

専修大学・経済学部・教授

研究者番号：60170304

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：公園緑地に対し、歴史的な意味合いを帯びる文化的価値に対する関心は、主要な研究対象でなかった。本研究では、都市公園に対して、従来の物的環境としての社会資本の捉え方に加え、文化的な社会的資本として捉えた。開拓という政策的背景をもとに、港湾都市(函館、小樽、室蘭、釧路)、内陸の殖民都市(旭川)という歴史的経緯や産業構造の異なる都市を対象に公園開設・および改修を対象に、公園が成立する場所の立地特性(空間)、公園という場所に刻まれた履歴(時間)に対し、市民・行政・団体などの関係者の場所に対する関心・働きかけ(人間)との関係性から、その織りなす過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

急激な近代化が推進された北海道において、都市公園の成立・改修、公園設計の過程を事例とすることは、本州府県のように近世までの街並みや城郭、寺社、行楽地などを公園化したプロセスとは異なる。本研究では、公園に対する社会文化的視点を、住民・地方自治体・政府等によって、公園に積み重ねた履歴を通し、社会と公園との関係性を読み解くと位置づけた。

研究成果として、石炭積み出しの港湾、鉄道によって都市形成が促された小樽、室蘭、石炭開発の影響もうけた釧路、内陸の軍事拠点として都市形成された旭川において、それぞれの都市構造や都市計形成による、公園成立、改修などの過程への影響を社会文化的視点から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Interest in the cultural value of parks and green spaces with historical significance has not been a major research subject. In this research, in addition to the conventional way of understanding social capital as a physical environment, urban parks are regarded as cultural social capital. Based on the policy background of reclamation, we target the opening and renovation of parks in cities with different historical backgrounds and industrial structures, such as port cities (Hakodate, Otaru, Muroran, Kushiro) and inland colonial cities (Asahikawa). , this research clarified that the location characteristics (space) of the place where the park is established, the history (time) engraved in the place called the park, from the relationship with the interest and approach (human) to the place of citizens, governments, organizations, etc. , those weaving process.

研究分野：ランドスケープ科学関連

キーワード：都市公園 社会文化 行政 市民 都市開発 鉄道 軍事

1. 研究開始当初の背景

公園を社会文化的視点から読み解く視座として、“地表面に刻み込まれた痕跡から人間活動のあり様や自然環境との関係を読み解くことに重点を置く見方と、深層にある意味、とりわけ人々が生きていく中で相互に関わり、自然との関係を積み重ねることによって構築された意味の探究を目指す見方”¹⁾が参考になる。申龍徹²⁾は、都市公園がどのようなプロセスで生み出され、どのように利用され、機能していくのかを、社会的に問う必要性を指摘している。小野³⁾は公園の文化的価値をとらえる観点として、機能、思想、場所という切り口を示し、場所に関して、物的空間のみならず社会的空間として、公園および周辺環境に積み重ねられた履歴の価値を歴史的にとらえる必要性を指摘している。この研究では、公園に対する社会文化的視点を、市民、地方自治体、中央政府等が公園開設や改修のプロセスに積み重ねた履歴を通じて、個々の公園の持つ歴史的意味を読み解くと位置づけた。

1)採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する 文化的景観の保護に関する調査研究会編 採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する 文化的景観の保護に関する調査研究(報告)平成22年3月、<<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazaishokai/keikan/pdf/hokoku.pdf>>, 更新日不明, 2018.9.11 参照

2)申龍徹(2004):都市公園政策形成史:法大出版局,335pp

3)小野良平(2007):公近代の公園の文化的価値とその保全の意義:ランドスケープ研究70(4),269-272

2. 研究の目的

都市公園がどのようなプロセスを通じて、形成された今日に至っているのかという、社会文化的視点から研究は端緒についたばかりである。このプロセスとは、都市公園の開設・改修、公園設計、その後管理運営における諸過程を、行政、市民などの当事者の働きかけを通じて把握されるものである。今日的な意味でいえば、市民参加や協働活動など、開かれたシステムとして、どの程度の社会的資本の蓄積に寄与したのかという、成果の把握と評価にも通ずる。一方、変化する都市空間の中で、歴史的に積層された履歴を有する都市公園は、その履歴を市民が解釈し語ることで、新たな意味が創出される。その意味でも、都市公園の開設、改修時などの、履歴を通じて、個々の公園の持つ歴史的意味を読み解くことは、眼前にある公園の再評価、文化価値の創出、市民協働社会を展開する素地を提供する。これまでの研究を踏まえ北海道開拓の首府である札幌における明治期に開設された3公園に対する学術的知見、港湾都市である函館公園に関する学術的知見をふまえ、市民・行政・団体などの関係者の場所に対する関心・働きかけ(人間)の三要素を統合的に捉え、社会文化的視点から比較論考を行う。

事例対象として、北海道内における港湾都市である、小樽、室蘭、釧路、内陸都市である旭川の各都市における明治、大正期に設置された公園をとした。開拓という政策的背景をもとに公園開設・および改修を対象に、公園が成立する場所の立地特性(空間)、公園という場所に刻まれた履歴(時間)に対し、市民・行政・団体などの関係者の場所に対する関心・働きかけ(人間)との関係性を明らかにする。

3. 研究の方法

開拓政策における都市と公園に関し、対象事例とした公園を取り巻く社会制度や地域行政の動向を整理し、拓殖政策における港湾都市と公園の関係、開拓初期に開設された他の公園の特性という3つの観点から整理した。次に、事例対象とした公園の開設及び改修において、公園に求められた機能、公園設立時の都市の特性、公園立地の地理的特性、地域行政・住民からの働きかけ(公園用地の選定、取得や公園用地の造成)の観点から、関連資料の整理及び解釈を通じて、当該公園の持つ歴史的意味を論考した。論考に際し、調査対象公園に関し既往研究で取り上げなかった資料を新しく加え、公園の開設・改修で論じられた内容を、地域住民や地域行政との関連性、行政施策による影響を踏まえ、社会文化的視点から検討した。

参照とした資料に関して、事例対象公園に関する既往学術論文、国会図書館、北海道立文書館、北海道立図書館、該当公園の都市の図書館および博物館、市役所が所蔵する公文書、書籍、地図、当時の小樽新聞、絵葉書、写真、雑誌等の関連情報を収集・整理した。現地で当時の市街地の発展状況と事例対象公園の位置関係を照合した。なお、本研究では、研究対象に即して、一次史料、二次史料の分類を明示し、取り扱った。

4. 研究成果

- 「小樽公園と手宮公園の開設及び改修過程に関する社会文化的視点からの史的考察において」(2019)では、政策や制度の変遷、拓殖政策における港湾都市の形成と公園、事例対象公園が開設される以前の北海道の公園について論考し、公園を取り巻く社会情勢の変化を捉えた。次に、社会情勢の変化を背景に、地方自治体や地域住民が小樽公園及び手宮公園の開設及び改修に示した考え方や行動から、公園の持つ歴史的意味を読み解くこととした。その結果、地域行政・住民からの働きかけ、公園に求められた機能、公園立地の地理的特性、公園設立時の都市の特性の観点をを用い、比較論考することで、時空間的視点から、公園の歴史的意味を相対的に捉えることを示した。
- 「釧路公園の構想から戦後の改変に至る過程に対する社会的文化的観点からの史的考察」(2020)では、以下の7点に焦点をあて、関連資料の整理及び解釈を通じ、当該公園の持つ歴史的意味を社会文化的視点から論考した。開拓政策における地方自治制度と構想以前の釧路の動向を整理し、宮本郡長による公園構想と公園用地選定の背景、公園用地取得における北海道庁と釧路町の交渉過程、公園予定地に対する開墾条件を含めた土地利用の変更、開設後の住民・行政による公園用地の活用や働きかけ、2度にわたる本多静六の公園設計の特徴と実現化、戦後における釧路公園の分離・縮小化、に焦点をあて、関連資料の整理及び解釈を通じ、当該公園の持つ歴史的意味を論考した。
- 「旭川市、常磐公園と神楽岡公園の開設前後と変遷に関する社会文化的視点からの史的考察」(2021)では、常盤公園および神楽岡公園を事例対象として、以下の6点に焦点をあて、関連資料の整理及び解釈を通じ、当該公園の持つ歴史的意味を社会文化的視点から論考した。旭川市街区画を含めた上川原野の開発と遊園地の構想、旭川町における公園設置要望の経緯と背景、常磐公園開設の契機となった旭川町と第七師団との交渉、常磐公園の設営・整備と河川改修に伴う公園改修、神楽岡公園の開設までに至る帝室林野局との交渉、上川神社の設置と神楽岡公園との関係性、に焦点をあて、関連資料の解釈を通じ、当該公園の持つ歴史的意味を論考した。その結果、両公園の開設や改修に際し、関係省庁との調整および立地地形による影響が明らかとなった。
- 「室蘭公園の開設から消失に至る過程に対する社会文化的観点からの史的考察」(2022)では、室蘭公園の開設から消失に至る過程について、資料の整理及び解釈を通じ、歴史的意味を社会文化的視点から論考した。焦点としたのは、市街地や地形、公園思想の公園設置に対する影響、用地選定後の無償貸付許可に至る経緯、本多静六の室蘭公園計画の特徴及び釧路公園との比較、公園整備に対する室蘭町・市や住民の取り組み、戦中から戦後に至る公園の荒廃及び消失である。その結果、室蘭公園の開園には、当時の公園思想、公園に対する行政施策、港湾工業都市の地形と市街地、室蘭町・市と北海道庁との交渉、改修には、本多静六による室蘭公園設計、市民による公園への寄付、閉鎖には陸軍の接收、公園行政の変化が要因であった。
- 「高岡古城公園の開設過程に対する社会文化的観点からの史的考察」(2023)では、高岡公園の開設に至る過程を社会文化的視点から論考した。まず、近世における高岡城下について、その構造、廃城後の軍事的・経済的対応および廃城後の城址の保全・利用管理について捉えた。次に、明治以降、高岡城址等の払下げ布達に対する対応、1872年の城址払下げから74年の公園開設請願に至る動向、75年の公園開設に至る服部嘉十郎の貢献に焦点を当て検討した。その結果、明治政府が示した政策(城址の改廃、公園開設)という制度的変革の中で、近世において、城跡に対する施策、住民による城址の保全・利活用で培われた成果や場所への愛着を契機に、新たな意義や意味が重ねられ、公園開設に至る過程が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 小林昭裕	4. 巻 84(5)
2. 論文標題 旭川市, 常盤公園と神楽岡公園の開設前後と変遷に関する社会文化的視点からの史的考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 437, 442
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 小林昭裕	4. 巻 34
2. 論文標題 山岳遭難記録に基づく, 行動形態および山群, 山域, 個別山域内で遭難特性の比較検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環境情報科学論文集	6. 最初と最後の頁 1, 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 小林昭裕	4. 巻 0
2. 論文標題 バックカントリースキーの遭難状況とスキー場のリスク管理上の課題: 北海道の札幌, ニセコを事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 157, 160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 小林昭裕	4. 巻 82(5)
2. 論文標題 小樽公園と手宮公園の開設及び改修過程に関する社会文化的視点からの史的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 445-450
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林昭裕	4. 巻 83(5)
2. 論文標題 釧路公園の構想から戦後の改変に至る過程に対する社会文化的視点からの史的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 473-478
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林昭裕	4. 巻 85(5)
2. 論文標題 室蘭公園の開設から消失に至る過程に対する社会文化的観点からの史的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 463-468
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林昭裕	4. 巻 86(5)
2. 論文標題 高岡古城公園の開設過程に対する社会文化的観点からの史的考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 小林昭裕
2. 発表標題 文化的生態系サービスとの連携による自然公園における文化的景観の保全活用
3. 学会等名 日本造園学会 関東支部大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林昭裕
2. 発表標題 富士山北麓にある世界文化遺産の普遍的価値の伝達・共有を図る文化的景観管理への試論
3. 学会等名 日本造園学会 関東支部大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小林昭裕
2. 発表標題 公園利用者とボランティアにおける文化的生態系サービス、緑地保全活動の認識・評価
3. 学会等名 日本造園学会 関東支部大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関